

童話

水谷 年 恵

五四

○太郎山の兎

十五夜のまん圓いお月様が太郎山の上に出ました。太郎山の兎達は大喜びで、山のてつぺんへ集りました。大勢の兎達が聲を揃へてお月様に、

「十五夜お月様、今晚は。」

と申し上げると、十五夜のお月様はにこ〜して、

「太郎山の兎さん達、今晚は。」

とおつしやいました。

太郎山の兎達は白い手拭で鉢巻して、お手々を繋いで大きな輪を作りました。これから兎の踊が始めるのです。すると、十五夜お月様の中の兎が、

赤い手拭で鉢巻して、

「えんやらほい、ぺつたんこ。」

とお餅を搗き出しました。それに合せて、太郎山の兎達が、

「えつさつさ、こらさのせ。」

踊り出しました。お月様の中では兎の餅搗、

「えんやらほい、ぺつたんこ。」

太郎山では兎の踊、

「えつさつさ、こらさのせ。」

餅搗と踊と、拍子を合せて、

「えんやらほい、ぺつたんこ。」

「えつさつさ、こらさのせ。」

と大變な賑ひです。

太郎山の麓には澤山の狸が住んでゐました。狸

達はあまり賑かなので、浮かれ出して穴の外へ出て見ました。すると、十五夜お月様の中の兎と、太郎山の兎とが、調子を揃へて、

「えんやらほい、ぺつたんこ。」

「えつさつさ、こらさのせ。」

と面白い騒ぎをしています。

さあ、狸達もたまらなくなりました。山の麓に並んで、大きな腹を山の方へ向けて、

「あつぼんぼん、あつぼこぼん。」

と腹鼓を打ち出しました。

月の中では兎の餅搗、

「えんやらほい、ぺつたんこ。」

山の上では兎の踊、

「えつさつさ、こらさのせ。」

麓では狸の腹鼓、

「あつぼんぼん、あつぼこぼん。」

夜中になると、お月様の中の兎の餅が、いゝ鹽

梅に搗けました。それで、太郎山の兎達も腰を下して休みました。麓の狸達も腹鼓を止めて休みました。

やがて、月の世界からお月様のお使の子供が二人下りて来ました。おいしいお餅を積み上げたお三方を持つて、一人は山の上の兎達の所へ、もう一人は麓の狸達の所へ来ました。山の兎達と、麓の狸達は、いたゞいたお餅を仲よく分けて、うまい〜と言つて食べました。食べてしまつてから兎も狸も聲を揃へて、

「十五夜お月様、御馳走さん。」

と言つたら夜が明けました。

○赤玉と白玉

三郎さんが外で遊んでゐると、ぶらりと、天から綱が下つて来ました。三郎さんは、

「あやあや、天から綱が下つて来た。一つぶら下

つて見よう。」

と言つて、其の綱の先へぶら下りました。すると其の綱がする／＼と上り出しました。三郎さんがこれは大變だと思つて居る中に、もう屋根の上の方まで上つてしまひました。手を放したら下へ落ちて、怪我をします。三郎さんは綱の先をしつかり握つてゐました。綱はする／＼、する／＼と、何處迄も／＼、上つて行きます。

下の方を見ると、家はマツチの箱位に見え、川は細い紐の様に見えます。高い／＼山も、もう下の方にお釜を伏せた様に見えました。其の中に三郎さんは雲の中へ這入つてしまひました。上も下も、右も左も、雲ばかりで、何一つ見る事は出来ません。綱は相變らず、する／＼と上つて行きます。雲の中から出ると、上は青天井で、太陽が大層綺麗に輝いてゐました。下の方は一面の雲の海で、もう下界の物は一つも見られませんでした。

「此の綱は何處迄上るのだらう。誰がひつぱり上げるのだらう。」

と三郎さんは不思議がつて居りました。

其の中に、三郎さんは空中に生えてゐる一本の樹の枝にひつかゝりました。三郎さんが綱を放して、樹の枝につかまると、綱だけがする／＼と上つて行つてしまひました。三郎さんはお腹がぺこ／＼になつてゐました。見ると、其の樹には赤いうまさうな實がなつてゐました。三郎さんは其の赤い實を一つちぎつて食べました。食べるとお腹がふくれて、何時の間にか眠つてしまひました。

眼が覺めて見ると、三郎さんは赤い鳥になつてゐました。三郎さんはびつくりしてしまひましたけれども羽ばたきすると、空を飛ぶ事が出来るので喜んで飛び廻りました。

其の中に三郎さんはうちへ歸りたくありません。赤い鳥になつた三郎さんは、高い／＼空の上

から、下の方へ、下の方へと、矢の様に飛んで来ました。釜を伏せた様な山が見え出しました。紐の様な川が見え、マツチ箱位の家も見えました。

「あれが僕のうちだ。」

赤い鳥の三郎さんは自分のうちを目あてにして一息に飛び下り、うちの中へすーつと飛び込みました。うちの中ではお父さんが、

「やあ、赤い鳥が這入つて来たよ。綺麗な鳥だ。」

とおつしやいました。すると、お母さんが、

「まあ、可愛い鳥ですね、三郎がゐたらどんなにか喜ぶでせうにねえ。」

と言つて、悲しそうな顔をなさいました。

赤い鳥の三郎さんは、

「お母さん、三郎です。僕は三郎ですよ。」

と言つて、お母さんのお膝の上に乗りました。けれども、お母さんには鳥の言葉はわかりません。

「あゝあゝ、私の膝の上へ乗つて来ました。何て

人なつっこい鳥でせう。」

と言つて、お母さんは羽を撫でて下さいました。

お父さんとお母さんは、其の赤い鳥が三郎である事は御存知ありませんでした。けれども自分達の子供のやうに可愛がつて下さいました。赤い鳥の三郎さんは、外を飛び廻つたり、うちの中を歩き廻つたりしてゐました。

或晩うちへ泥棒が這つて来ました。お父さんもお母さんも、赤い鳥の三郎さんも、ぐつすり寝込んで何も知りませんでした。其の中に泥棒は大切な寶物の白い玉を盗んで行つてしまひました。

朝になつて、お父さんもお母さんも、寶物の無くなつた事を大變お悲しみになりました。赤い鳥の三郎さんは、寶物の白い玉を取り返さうと決心して、うちを飛び出しました。

赤い鳥の三郎さんは山奥の方へ飛んで行きました。すると、大きな洞穴がありました。其の洞穴

の一番奥まで這入て行くと、其處に水晶の様な水の湧き出る井がありました。赤い鳥の三郎さんは咽喉が渴いてゐたので、其の水を一口飲みました。すると、お腹の中から赤い玉が一つころがり出て忽ち魚になつてしまひました。

魚になつた三郎さんはぼんと一つ跳ねて井の水の中へ這入りました。清い水の底まで沈んで見ると、搜してゐた寶物の白い玉が有りました。魚の三郎さんは大喜びで、其の白い玉をばくりと飲んでしまひました。それから、水面に浮んで、又ぼんと一つ跳ねて井の外へ飛び出しました。丁度其の時、泥棒が歸つて來ました。

「ははあ、此の井の水を飲んで魚になつたな、甘さうな魚だ、焼いて食つてしまはう。」

と言つて、魚の口を兩手で引裂きました。すると腹の中から白い玉がころがり出て、魚は忽ち人間の三郎さんになつてしまひました。三郎さんは、

「此の泥棒め、よくもうちの寶物を盗んだな。」

と言つて、泥棒の兩手を縛つてしまひました。

泥棒はこれは大變だと思つて逃げ出す拍子に井へ落ちてしまひました。あつぶ／＼と沈んで行く中に水を飲んだものですから、泥棒は忽ち魚になつてしまひました。

三郎さんは井の側にころがつてゐる赤い玉と、白い玉とを拾ひ上げて、

「やあ、うちの寶物が二つになつた。」

と言つて喜んでおうちへ歸つて來ました。お父さんとお母さんは、

「三郎が歸つた、三郎が歸つた。」

と言つて、雀踊をして喜びになりました。